日本土木史（昭和16年～昭和40年）の完成と今後の課題

日本土木史編集委員会

1. 土木学会による日本土木史の出版

「日本土木史—昭和16年～40年」がさる4月，土木学会の日本土木史編集委員会の手によって出版の運びとなった。同委員会による前著，「日本土木史—大正元年～昭和15年」が出版されたのが昭和40年であった。その直後から開始された今回の土木史は，約8年，約250名の執筆者の合作によってようやく完成した。

この二著に加えて，「明治工業史—土木篇，鉄道篇」（工学会・丸善，昭和4年，全10巻のうち），さらに「明治以前日本土木史」（土木学会および岩波書店，昭和11年刊）を加えれば，有史以来昭和40年までのわが国土木史の概観が揃ったことになる。明治工業史は複刻版が出たし（学術文献普及会），明治以前日本土木史はこの秋岩波書店から複刻版として出版される予定である。とくにこの著書は類書がほとんどなく，単に土木界のみならず，他の多くの分野においても貴重な文献として高く評価されている。時代物の小説や演劇作成のさいにも，「明治以前日本土木史」はしばしば利用されていると聞く。昭和11年発刊時には2300部出版されたと記録されているが，その後戦災その他で失われたものも多いらしく，古本街では7万円もの値がついていた。もっとも複刻版出版のニュースが伝わって最近は値も下がったようである。

今回の「日本土木史—昭和16～40年」を含め，上記5冊はいずれも大部の書であるが，明治以後の百年の土木技術を要約してまとめた書に「日本の土木技術—100年の発展のあゆみ」が，土木学会創立50周年記念出版事業の一環として昭和39年10月に出版されている。土木の各分野ごとに，ここ100年の技術の発展の経緯が読み物風に書かれている。いくつかの大学で副教科書的に利用され，いまではすっかり売り尽くし残部はない。

2.「日本土木史—昭和16～40年」の紹介

今回出版の「日本土木史—昭和16～40年」は，土木界が戦時中の軍事土木から，戦後の戦災と経済復興を経て高度経済成長時の各種の基盤整備，さらに都市化に伴う都市環境整備へと激しく移り変わりつつ大きな発展をとげた時期を扱っている。いわば現代土木史に相当する本書の編集にあたっては，従来学会が取り組んだ土木史の場合と異なり，対象資料は膨大でありその取捨選択とその要約に苦労することとなった。もっとも，戦時中のとくに海外土木事業については，かなりの努力は払ったつもりであるが，資料の散逸その他で必ずしも十分な資料に基づいたとはいいがたい。土木史上貴重な事実だけに今後なおその探索には努力を続けたいと考える。

一方，本書の扱った期間は，社会の価値観も次々と変転し，かつ現代の生々しい記録でもあるため，土木事業や技術の評価は困難な点が多かった。したがって，叙述は原則として客観的記録としての史料を立て前とした。とはいえ，膨大な資料からの要約や選択の段階で一種の評価が行なわれたことは否めない。軍事優先から食糧増産優先，さらに経済優先から福祉への重点移行へと国策が急転回するなかで，土木事業の舞台もかつて山野が主体であった時代から，都市土木が重要な地位を占めるに至る。都市土木の時代においては，都市活動や市民生活に支障をなるべく与えないようにして事業をすすめなければならない。また，土木事業の規模の拡大に伴い，それが周辺環境に与える影響も複雑化してきた。事業計画にあたっても，従来のように最初に掲げた目標に邁進するのみでは，すまなくなってきた。本書が扱った期間の終りごろに，土木事業に対するこのようなひとつの転期が訪れたといえる。この現代土木史は，その転期に至るまでの一区切りを示すともいえよう。東海道新幹線，東名・名神高速道路，黒部ダム，鹿島臨海工業地帯の形成など，一つのエポックを画す大事業が次々と完成したのは，まさに昭和40年前後であった。

本書には巻末に約60ページにわたる明治元年以降の土木年表を整理したのも大きな成果といってよい。従来の土木史関連の書において年表は一般にきわめて貧弱であった。今回の年表もいわば初めての試みであるため，おそらく不備の点も多かろうと思う。それらについてはお気づきの点をぜひご指摘いただき，将来はより充実した年表を備えたいと考える。

前著までの土木史には建設業史がなかった。本書には初めて建設業史を入れ，昭和15年以前の状況について

も要約的に紹介された。建設業史に関しては，土木工業協会と電力建設業協会によって昭和 46 年に「日本土木建設業史」が発刊された。さきに昭和 43 年には同じく土木工業協会と電力建設業協会によって「日本土木建設業史年表」が発刊されており，それが上述の建設業史に包含された。

前著「日本土木史—大正元年～昭和 15 年」の構成と様式におおむねそったとはいえ，上述のような点が加わり，かつ全巻の配列にも若干の新鮮味を出し，冒頭に総論を加え，明治以来の社会の動きと土木事業の発展との関係について記したのも本書の新しい特徴といえよう。

こうして完成した本書は，350 字詰の原稿用紙で約 7 600 枚，図 400 葉，表 750 点，写真 120 点に及び，B5 版で 2 040 ページの部厚い書となった。定価 36 000 円（会員特価 32 400 円）は，やや高いという声もあるが，この種の書としては必ずしも高額とはいえないと思われる。ちなみに，昨年出版され評判の高い日本建築学会編「近代日本建築学発達史」（丸善刊，B 5・2 198 ページ）は 52 000 円である。

3. 土木史への課題

すでに述べたように，今回の出版によって日本土木史の公式記録的な整理が，土木学会によって一段落した。しかし，これは土木史の研究とか技術史の本来の目的から考えれば，むしろ序の口にすぎないといえる。というのは，土木史についての調査研究は現在きわめて不活発かつ貧困な状況にあると考えられ，その意義さえ広く認識されてはいない。むしろ少数の篤志家が，この種研究については理解の不十分な情勢下で細々と仕事をすすめているにすぎない。ともすれば土木史の調査などは，懐古趣味にすぎないと思われたり，はなだしき場合にはこれからの土木界の発展にさして役立たないとさえ思われることもある。建築史や農業土木史については技術史的研究が継続的かつ組織的に行なわれ，それぞれの学界では，その意義も強く認識されていることを考えると，この面での土木界の認識の浅いことを反省しなければなるまい。歴史的に重要な土木構造物も文化財の指定を受けることはきわめて少なく，それらが破壊されるときも，歴史的建築物の場合ほどには反対運動も起こらない。江戸時代や明治時代の土木に関する重要な文献や地図の多くが，篤志家の熱意によってのみ保管されている実情であるのは慨嘆にたえない。わが国土に刻み込まれている数々の土木遺産は，それらを正しく保存し後世に伝え，かつそれを一般住民に啓蒙することによって，長い歴史を通して貢献してきた土木事業を一般にも理解して貰えるであろうし，国土と土木事業を愛する次代の後継者をひきつけることもできよう。

土木構造物を核とする機能施設や，さらにはそれらを包含する開発事業となると，それら全体を後世に遺すことはできない。しかし，その事業が地域住民に与えた幸福は，無形ではあるが人びとの心に強く刻まれるであろう。さらに重要なことは，その事業の筆跡はその地域の自然と社会に強く刻み込まれ，次の開発に大きな影響を与える。わが国のように，長い歴史をとおして次々と密度高い開発事業を繰り返してきた場合には，新たな開発はつねに従来の開発の下絵の上にかかれる。下絵との調和を念頭に置かない限りすぐれた開発は行なえないとさえいえる。近年の土木施工の飛躍的発展による土木事業の発展は，われわれの国土への欲望をすべて満たしてくれるかのごとき錯覚をさえ抱かせるに至った。土木事業が転期にたっている現在，この過信を拭払し，自然に対して新しい認識に立つことが要請されている。自然を直接相手にし，住民の日常生活と直接結びつく土木事業にたずさわる者は，巨大な自然に対しより謙薦になり，先人たちがこの自然をどのように理解し，どのように対してきたかを深く知る必要があろう。それによって初めて自然の特性に根ざした真の開発計画をすすめることができるであろう。従来のさまざまな土木事業がどのような契機で始められたか，どのような成果をあげたか，とくにそれが関連地域の自然や社会にどのような影響を与えたか，これら視点こそ，これからの土木事業をすすめるにあたって，最も重要な検討事項とならねばなるまい。またそこにこそ，これからの土木史研究がメスをあてねばならぬ問題点があろう。

このような見地に立つとき，今回出版された土木史を含め，従来の土木史書は，単に計画の紹介と事業経過の記録にとどまり，計画立案の経緯とかそれが自然や社会に与えた影響についての検討はきわめて不十分である。また，個々の事業の記録はあっても，それが歴史のなかでわが国の社会に与えた影響とか，その事業が自然に与えた影響によって，のちの開発計画をどのような形で規制することになったかについては，本格的には検討されていないといえる。

土木技術という面からみても，外来の輸入技術がわが国土木技術に与えた影響，材料の発展が土木技術にどのように影響を与え，ひいては土木事業の値をどう変えたか，行政と事業との関係，学問と事業との関係など，検討すべきさまざまな課題が残されている。これら課題を個々の技術や事業を種に検討することこそ，転期に立った土木事業を今後どのような方向に向けていくかを本質的に考える場合に避けてとおることのできないテーマのはずである。今回の土木史は，それら課題への資料もしくは題材提供の役割を持つものといえよう。

重要土木史蹟の保護と啓蒙，土木史料の発掘と保管，上述諸テーマの検討など，土木史に関連してなすべきことは多い。しかも，事柄によってはいますぐ行なわなければ無意味なことが多い。大学によっては建築史や農業史の講座があるが，土木界にはどの大学にもそのような機関はなく，土木関係の官庁もしくは民間団体にもそれを担当する常置機構はない。したがって篤志家がその役割のほんの一端を自前で行なっている状態である。いずれはそのような常置機関が設けられるべきであるが，さしあたりは従来土木史編集などに実績をあげてきた土木学会においてその仕事を行なうべきものと考えられる。

4. 土木史に関する文献

最後に，冒頭ならびに文中に紹介した以外の土木史関連の文献の一部を簡単に紹介しておく。

土木学会による土木史関連の出版は冒頭に紹介したものがほとんどであるが，そのほか土木学会東北支部が創立 30 周年記念として昭和 44 年に出版した「東北の土木史」がある。少し古いが，異色かつ貴重な出版として，昭和 18 年に「本邦土木と外人」が土木学会から発行されている。明治初期のお雇い外国人の紹介とそれら外国人の日本の土木への貢献の概要が網羅されている。そのほか，土木学会誌には随時土木史関係の記録や寄書が掲載させているが，とくに昭和 47 年以降，毎春の臨時増刊 "*Annual*" にその前年の "土木関係の年表" が整理されていることをお知らせする。また，昭和 43 年 1 月から昭和 44 年 8 月にかけ，「郷土の土木」が連載されたことがある。また，個々の事業の記録の記念出版がそれぞれの施主や企業体からのみならず学会からも随時発行されていることはご存知の方も多かろう。

学会以外からの総括的土木史書としては，さきに掲げた建設業史のほかに，日本科学史学会編の日本科学技術史大系全巻のなかに，第 16 巻「土木技術」が第一法規出版(株)から昭和 45 年に出版されている。同大系のなかには，土木と関係深いものに第 11 巻「自然」もある。また，現代日本産業発達史全 34 冊のなかに第 3 巻電力が昭和 39 年に交絢社出版局から出版されている。治水分野ではあるが，真田秀吉著「日本水制工論」（昭和 7 年，岩波書店）も貴重な業績であり，日本思想大系のなかの「近世科学思想（上）」（昭和 47 年，岩波書店）も特異な治水史書である。また，きわめて要約的かつ一般向けの「日本土木技術の歴史」（昭和 36 年，地人書館）もある。その他，個々の事業史や社史，伝記その他は枚挙にいとまないのでここでは省く。実はそれらのリストアップや紹介の機関もないのも残念なことである。

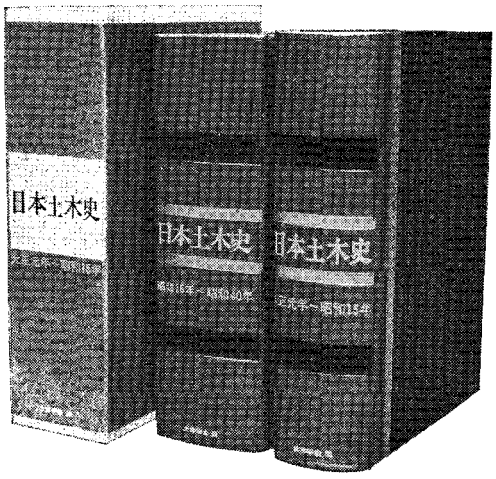
最後に，「日本土木史—昭和 16～40 年」の完成に至るまでにご協力とご支援を惜しまなかった執筆者，資料提供者および側面からご援助賜わった方々に深く謝意を表したい。さらに，この機会に会員諸氏が土木史への理解を深め，とくに若い会員がすすんで土木史に興味を示し，調査研究を行なうことを期待する。と同時に，すべての会員が土木史の研究調査への基盤づくりに理解を示し，それを援助して下さることを切に念願する。

（委員長・青木楠男／執筆・<幹事長>高橋裕）

日本土木史
大正元年～昭和 15 年 ●復刻版
24 000 円　会員特価 21 600 円（〒600 円）

日本土木史
昭和 16 年～昭和 40 年 ●新刊
36 000 円　会員特価 32 400 円（〒600 円）

明治以前日本土木史
予価 20 000 円　9 月 20 日 予約締切
11 月末日刊行予定（岩波書店）



特別上製クロース装・気品あるデザインで評判です
● カタログ申出次第進呈します ●

● 全国主要書店で扱います ●